第12回 夏の教育セミナー　2025年大学入学共通テストから考えるこれからの教育

生成AIで教育はどう変わる

英文添削、早く正確に／評価基準も提案

近年、急速なスピードで進化を続ける生成AI。教育現場の利用について、文科省は校務や学習場面での積極的な導入を促していく考えだ。学校の生成AI利用の最前線を追った。

「友達の感じている不満を聞いて、その解決策を書いてみて」

東京都千代田区立九段中等教育学校であった5年生の英語コミュニケーションの授業。矢野絢奈教諭が英語で指示すると、生徒たちが隣同士で話し合いを始めた。

ある生徒は「私の友人は傘が何度も盗まれたことに不満を持っている。問題を解決するには折り畳み傘を持った方がよいのではないか」などとライティングシートに手書きで記入し、周りの生徒と交換。英文の誤りなどの指摘をもらって修正した後、教員に提出した。

生成AIを活用するのはここからだ。矢野教諭が生徒の英作文をスキャナーで読み取ると、AIが内容・構成・表現の評価と、文法と語彙の改善案、次回に向けたコメントを瞬時にまとめる。教員は最終的な確認をするだけで返却でき、短時間で詳細な添削が可能になった。矢野教諭は「読み取り精度も非常に高く、丁寧に書かれていれば正確に読み取れる。これなしの授業はもう考えられない」と話す。

お互いに聞き取った話を英作文にして提出。ＡＩが添削する＝６月18日、九段中等教育学校

国語科では生徒の思考を可視化するのに利用した。教員があらかじめプロンプト（指示文）を設定しておき、AIと対話することで物語の「深い読み」につながるようにした。「生徒のプロンプトを見ることで、何を考えていたか分かる」と廣瀬紘太郎教諭は導入の効果を口にする。

同校でデジタル化を担当する市川淳尉主任教諭は、校内で生成AIが積極的に活用されている背景として「授業改善に使いたいという教員の意欲が高いことに加え、開発側に頻繁に要望や改善点を伝えられることが大きい」と強調する。

現在では多様な学習用AIが登場している。例えば、東進ハイスクール・東進衛星予備校などを運営するナガセは、和文英訳を即時に採点・添削できる「英作文1000本ノック」や、プログラミング演習ができる「情報Iプログラミングノック」などを開発。大学入試に最適化されたAIが添削し、教員個人の努力に委ねられていた個別の添削指導をAIで全ての生徒が受けられるようにした。

志望理由書を添削

教員が授業以外で多くの時間を費やしているのが校務だ。山形県立酒田光陵高校では、生徒の志望理由書の添削で大幅な時間削減に成功した。

卒業後の進路が多様で、大学を希望する生徒もほとんどが推薦入試を受ける。提出書類の作成で進路指導担当の教員にかかる負担は大きかった。

そこで生成AIで読み取り、誤字脱字や論理構成、表現を訂正させることで、これまで40分かかっていた書類の添削はわずか10分に激減した。進路担当の湯澤一教諭は「書類を添削する時間を短くできた分、生徒と相談しながら完成させることができる」と語る。一方、生徒の初稿がAIに丸投げしたものだと、話し合いの場で本人が何も答えられないケースもある。「自分で考えた上で、AIを使うように指導することは欠かせない」

話し合い活動の評価

生成AIを使って、生徒の学習をより丁寧で客観的に評価しようとする試みも始まっている。

東京学芸大学附属竹早中学校ではAIに学習指導要領を読み込ませ、ルーブリック（評価基準表）の作成や実際の学習評価まで委ねてみた。

実践したのは社会と国語。例えば、社会の歴史的分野では「社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付ける」とする社会的な「見方・考え方」を基に4段階のルーブリックを設定。さらに生徒が答えた文章をルーブリックに照らして評価させた。

社会科担当の上園悦史主幹教諭は「AIが作成したルーブリックや学習評価は教師が行う場合と比べて、ほとんど違和感がなかった。データがたまれば、妥当性のかなり高いルーブリック評価ができるようになる」と驚く。

社会科で書いた文章を国語の観点で評価するなど、教科横断的な学習評価に活用する可能性も模索しているという。

同校では話し合い活動の評価にもAIを取り入れた。グループ内の生徒の声を認識し、それぞれの生徒が話し合いの中でどのような資質・能力を発揮しているかを明らかにしようと試みた。

研究に関わる東京学芸大学教育インキュベーションセンター長の金子嘉宏教授は「これまで対話的な学びが重要だと言われながら、その過程で生徒が何を学んでいるのかを評価できなかった。AIを活用すれば見取れる可能性がある」と話す。

同校の教育AI研究プログラムにも携わる遠藤太一郎教授は「生成AIの導入によって伴走者として教師に求められる資質・能力も大きく変わってくる。そのためのルーブリックも開発していく必要がある」と指摘する。

クロスロード　交差する視点

公立高校入試を併願制に

中室　牧子　慶應義塾大学教授

政府が公立高校の単願制の見直しを進めることが大きく報道された。これは私が、東京大学マーケットデザインセンターの小島武仁教授らと共に、4月22日の「デジタル行財政改革会議」で提案したものだ。

周知の通り、現在多くの都道府県で公立高校入試は「単願制」で、受験生は1校にしか出願できない。このため、生徒たちは「本当に行きたい学校」ではなく「合格の可能性が高い安全校」を選ばざるを得ない状況が生まれている。そこで、生徒がより希望に沿った進路を選べる仕組みとして「受け入れ保留アルゴリズム」を用いた併願制の導入を提案した。

これは単純な併願制とは異なり、次のような流れで進む。まず、受験生が志望校を第1志望から第3志望のように順位付けして出願する。各高校も、内申点や学力検査、面接の結果に基づいて受験生を評価し、順位付けする。

次に全ての受験生が第1志望校に「仮申し込み」する。各高校は、定員の範囲内で最も評価の高い生徒を一時的に「受け入れ保留」とする。定員を超えた他の生徒は「不合格」となり、その生徒たちは、次に希望する学校に仮申し込みを行う。このプロセスを繰り返すことで、生徒は不合格にならなかった中で最も行きたい学校1校だけに合格する。

この仕組みを導入すれば、出願後の辞退や追加合格の連絡といった煩雑な手続きが増えることなく併願制を導入できるため、教職員の事務負担を心配する必要はない。何より、生徒は合格可能性を意識して志望順位を決める必要がなくなるため、「本当に行きたい学校」に正直に出願できるようになる。進路指導も、生徒が本当に進みたい道に進むためのものに変わるだろう。

この制度は、生徒と学校の双方にとって公平性が高く、無駄のない設計だ。既に保育所の入所選考や研修医の配置などでも活用されており、有効であることが確認されている。今後は先進自治体と連携して試行的導入を進めるという段階となる。

東進　大学入学共通テスト　問題分析と指導のヒント

英語

探究活動、幅広い題材で出題

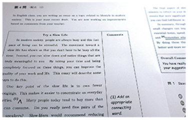
令和7年度の大学入学共通テストは、リーディングは令和6年度の中問（A問・B問）を含む10大問構成から8大問構成へと変更され、それに伴い、設問数とマーク数も減少した。また、試験全体の総語数は令和6年度から約700語減り、約5700語となった。

一方で、リスニングは設置初年度から変わらず全6大問の構成で、出題形式や全体の配点にも大きな変化はなかった。リーディング・リスニングともに、令和4年度に大学入試センターが公表した試作問題と同様の形式の問題が出題された。リーディングの第4問・第8問は、それぞれ試作問題の第B問・第A問に、リスニングの第5問は試作問題の第C問に相当する形式だった。

共通テストの指導に際しては、出題背景に「探究」の概念があることを念頭に置きたい。令和7年度の新課程の共通テストでは、「探究」の活動がこれまで以上に幅広く題材として取り上げられていた点が特徴的である。具体例として、リーディングの第4問と第8問を紹介する。

まず第4問は「スローライフの実践」に関するエッセーを、教師からのコメントに基づいて推敲する問題である。不足している接続語や文を補ったり、文章の一貫性の観点から不自然な箇所を修正したりする設問が出題された。これは他者の指摘を参考にエッセーを完成させていく過程が題材となっている。

次に第8問は「宇宙開発の是非」をテーマにエッセーを書くために、アウトラインを作成する問題だった。この設問ではまず「宇宙開発」に対するさまざまな立場の人の意見文を読み、自分が賛成・反対どちらの立場から書くかを決める。問題の設定では「反対」の立場が指定されている。そして自分の主張に説得力を持たせるために、記事や数値データといった追加資料を読み解いていく。これもエッセー執筆に向けたアウトラインの作成過程が題材となっている。他の大問でも一貫して、「探究」活動が取り上げられている。


エッセーを書く第４問の設問

このような探究型の問題に対応するためには、授業内でも「探究」活動を積極的に取り入れることが望ましい。例えば、教科書の本文を読んだ後に、その内容に関連する問題提起を行い、生徒同士で英語でディスカッションさせたり、自分の意見を書かせたりする。また、その応用として、エッセーを読み合い、フィードバックし合うことなどが挙げられる。こういった発信型の活動を効果的に実践するためには、活用できそうな英語の語彙やフレーズ、文法事項を事前に学習することが有効な方法となるだろう。

（東進ハイスクール・東進衛星予備校　英語科）

※「第12回 夏の教育セミナー」に先駆けて高校教育や大学入試に関する情報を掲載します。

全国の先生方とともに、「高校教育のこれから」を考えませんか？

夏の教育セミナー

主催：日本教育新聞社／株式会社 ナガセ（東進ハイスクール・東進衛星予備校）
後援：文部科学省、各都道府県教育委員会 ほか（申請中）

第12回　2025年大学入学共通テストから考えるこれからの教育

明日から使える「生徒指導のヒント」「授業のヒント」が満載！

8/1（金）東京会場
ベルサール新宿グランド
イベントホール：東京都新宿区西新宿8-17-3
住友不動産新宿グランドタワー1F
席数限定

8/4（月）大阪会場
スイスホテル南海大阪
大阪府大阪市中央区難波5-1-60　8F
席数限定

【開催時間／両会場共通】13:00～17:00予定（交歓会～18:00）
ご来場の先生には、限定資料や研究に役立つ情報をご提供いたします。
また、追加申込なしで8/8～21のオンライン配信も視聴いただけます。

高等学校の先生対象

オンラインにて配信
8.8（金）～21（木）
［8～14日］東京会場分
［15～21日］大阪会場分
学校や先生方のご自宅から、期間中ご都合の良い時間にオンラインで参加できるWEBセミナー形式です。パソコン・タブレット・スマホから講演動画を視聴できます。

ご都合のつく先生方は、参加者同士の交流もできる
会場へのご参加をおススメいたします

転換期の高校教育を考える一日
教育の“いま”と“これから”を知り、高校現場での実践に生かす

4分でわかる！
夏の教育セミナー紹介映像公開中
講演者のお一人でもある安河内哲也先生［東進英語科講師］が、セミナーの魅力をコンパクトにお伝えした動画です。ぜひご覧ください。

参加無料

最新情報は随時公開！
www.summer-seminar.com
夏の教育セミナー　検索
日本教育新聞、および東進（株式会社ナガセ）のウェブサイトからも、専用サイトに行くことができます。

お申し込みはこちら
好評受付中！